

住居学の授業評価について

家政教育専修 曲田 清維

1. はじめに

「住居学」は、原則2回生対象で後学期の開講科目である。家政教育専修にあつては必修科目、生活環境コースにあつては選択科目Aの位置づけとなっている。また免許科目ゆえに、適切な学生数が確保され、毎回の意見交換も活発である。

2012年度後学期は他学部聴講生を含め当初は25名、最終まで辿り着けた学生は22名であった(但しアンケートは21名)。途中の宿題や提出レポートの多さ(決してそうとは思えないのであるが)のせいか、最近の受講生にとっては少しきついのかもしれない。ハードルは適切にしつつも、全員が最終コーナーまで辿り着けないことについてはやや悔やまれる。

2. 受講生アンケート結果

最終授業時に簡単な授業アンケート調査を実施。無記名で記入の上、21の回収。

- ・ 授業内容のヴォリューム
適切 ; 16 (76.2%)
多い ; 5 (23.8%)
- ・ 進行速度について
適切 ; 8 (38.1%)
早い ; 13 (61.9%)
- ・ 資料について (特に量的なこと)
適切 ; 1 (4.8%)
多い ; 20 (95.2%)
- ・ 全体の理解度
よく理解できた ; 4 (19.0%)
普通 ; 17 (81.0%)

15回分(+テスト)の授業内容のヴォリュームについて単純に尋ねた結果、4分の3が適切、4分の1が多いとした。テキストを使用しながら、新しいデータやトピックを提供しており、実際ヴォリュームは多いものの、まずまずの結果である。もちろん、受講生の顔を見ながら内容を精選していったのは当然である。

進行速度はヴォリュームと関係する。適切とする受講生は38%、早いとするのは62%で、精選したとしても猛スピードで進めているのが本音である。住居学のバックグラウンドである各分野一住生活の基本法則、住宅計画、住居設備、住居管理等一を漏れなく学習していくには、当たり前だがいくら時間があっても足りない。

資料は、トピックや補足データとしてほぼ毎回配布している。結構な分量になる。予想通り、適切とする受講生は5%、多いとする受講生が95.2%と圧倒的な不満となった。資料は自宅学習用としても位置づけているものの十分な解説がなかなか伴わず、結果的にそれが不満となったようだ。配布物の適切性並びに説明等についてはもっと精選し、また自学自習につながるような工夫が求められるものとなった。

結果的に全体の理解度については、よく理解できたとする受講生が5分の1、普通とする受講生が5分の4と、大凡理解したとしている。但し、この数値は、各人の自己評価に近く、期末考査の結果とは必ずしも連動しづらい。

3. 実践的学習に関して

複数回の実践実習も組み入れており、代表的な2例について学生評価を紹介する。

(1) 「紙ぶるる」の作業

ひとつは「紙ぶるる」であり、住宅の耐震性—地震に強い家づくりとはどんなものか—を既製のキットを使って確かめる学習である。

2人ひと組で相談しながら、紙で作った家の断面模型を作成し、壁に当たる部分に「筋違い (=筋交い)」を入れるとどうなるかを調べるものである。「筋違い」の役目がひと目で理解されると同時に、その入れ方によって家の揺れ方が様々であることが即座にわかる優れたものの教材である。

名古屋工業大学で試作作成したものが市販されており、ネットでダウンロードも出来る(但しアンケートに答える必要あり)。一般の学校教員でも比較的容易に入手可能である。因みに、以前、K首相も子どもと一緒に地震関連のモデル学習会で、同様のキットで模型造りに励んで楽しんでいた。

受講生の声は、「とてもわかりやすい」「紙ぶるるは筋交いを入れることで全く揺れ方が違っていたのであっと驚いた」「筋交いの必要性を実感することができた」「教科書(テキスト及び配付資料)と実体が一致していた」「身近に体験できた」「地震対策がよく理解できた」「自分で実際に目で見て確かめることが出来て良かった」「実際の揺れ方が目に見えてわかりやすかった」など肯定的な意見が多かった。

(2) 照度調べ

もう一つの「照度調査」は、これも2人ひと組で照度計を使っての調査である。まず、教室内の照度を計測し、照度計の仕組み及び計測方法を確認し、その後、各人の住宅(含む下宿マンション等)の各部所を計測する学習である。小さなワンルームマンションでも、玄関、トイレ、バスルーム、

キッチン、食事コーナー、学習コーナーなど計測場所は沢山あり、自然光、人工光により、適切な照度か否かが科学的に把握できる。自宅に計測器を持ち帰っての調査を実施し、JIS 照度と照らし合わせながらのレポート提出なので、十分なフォローができないのが少々悩みの種となっている。

受講生の声は、「理解しやすかった」「照度調査は実感できてよかった」「実践することでより実感でき実生活と結び付けることができる」「容易に調べることができ良いと思う」「実践調査することで、知識をより深く理解することができた。当たり前のように利用している照明などに意識を向けることができた」等の好評価が得られた。ただ、JIS 照度の説明がやや不十分で受講生任せ(勿論根拠資料は配付)になっており、時間不足を理由にしたとしても、反省すべき点である。照度計は大凡の小・中学校でも揃えてあり、簡単にできる実験であるため、多くの教材が蓄積されている。ただ、直接的な生活改善に結び付けるには、学校教員側にも、もうひとつ工夫が求められる。

4. さいごに

大忙しの「住居学」では、新聞を読みこなす自学自習を課している。具体的には、後期の間に3回、新聞記事—内容は広く住まい・建築・環境・まちづくりなど自由—を拾い集め、それに対するコメントや調べたことをレポート提出としている。結構難儀らしく、期限が迫ってくると受講生はそわそわである。何せ下宿生の多くは新聞購読していないし、何が適切なテーマか見つけられないと言うことらしい。ただそれも3回目位になると落ち着く。大昔は、2週間に一回などとハードな義務を課していたが、今はとても無理である。学生との根比べがいつまでも続く。